令和4年度

No.	プロジェクト名	本学担当者	共同研究機関・担当者		研究内容（連携事業内容）
1	小・中学校における児童生徒一人ひとりの「確かな学力」の向上につながる組織的・継続的な校内研究 －自校の課題解決に向けた重点的な取組を通して－	○辻　延浩 楠見丹生子(附属小学校副校長)	滋賀県総合教育センター 所長　近藤　敏夫	主幹　加藤 由紀 研修指導主事　菅原 薫 研究員　小笹 由花，西村 央	昨年度のプロジェクト研究の成果と課題を踏まえて，地域の学校（プロジェクト参加校）において組織的・継続的な校内研究の体制をつくるとともに，各学校の課題解決に向けた授業改善を積極的に行い，児童生徒一人ひとりの「確かな学力」の向上を目指す。その取組において，本学の教員と附属学校副校長がこれまでの研究と教育の実績をもとにトータルアドバイザー兼共同研究者として参加し，本プロジェクト研究で得られた成果を附属学校園での取り組みに生かす。
2	大津市中学校部活動地域移行検討プロジェクト	辻　延浩	大津市教育委員会事務局	学校教育課長　中野　啓一 指導主事　奥野　雅也	大津市の中学校における部活動の地域移行に関し、学識経験者、スポーツ・文化活動の指導経験者、大津市ＰＴＡ関係者、市職員からなるプロジェクト会議を立ち上げ、2025年（令和7年）度完全実施に向けて、地域移行のあり方を検討するとともに、具体的な方策について一定の見解を定める。
3	理科教育に関する研究	藤岡　達也	滋賀県総合教育センター 所長　近藤　敏夫	係長　澤　寿朗 研究指導主事　権並　渉 研究員　尾田雄祐	1人1台端末を活用し，個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させることを通して思考力，判断力，表現力等を育成し，「確かな学力」の向上を目指した高等学校理科における教科指導改善の研究を行う。この取組により，科学的に探究するために必要な資質・能力の育成を目指した高等学校理科の授業改善に寄与することを目的とする。
4	幼児用「運動遊びカード」の開発と実践	奥田　援史	草津市こども未来部 副部長　前田典子		幼児用「運動遊びカード」を作成・利用することで、幼児の活動量を検討する。
5	滋賀県における幼児の運動能力に関する調査　（2022年度）	奥田　援史	滋賀県教育委員会 主事　村部謙介		滋賀県における幼児の運動能力の現状を分析すること。
6	中学校数学科指導力向上プロジェクト研究	大橋　宏星	滋賀県総合教育センター 主幹　加藤　由紀	研修指導主事　高橋　利彰 研究員　北村　俊	研修と実践の往還により、1人1台端末を効果的に活用し、生徒が「読み解く力」を高め、発揮することを通して、問題発見・解決の過程を重視した中学校数学科の教科指導改善を進めることで、「確かな学力」の向上を目指す。
7	確かな学力を身に付け、自ら考え学び合う児童の育成をめざして ～「読み解く力」の視点を踏まえた、確かな学力を身に付ける算数科の授業づくり～	大橋　宏星	東近江市立 能登川北小学校 校長　北村　定治	教諭（研究主任）　榎並　洋貴	「問題場面を的確に把握する（情報を整理する）こと」「解答に向かう道筋を自分の言葉で説明すること」にこだわって授業を展開することで、「題意や相手の考えを的確に読み解くことができる子ども」「自分の考えを根拠とともに明確に説明しようとする子ども」の育成をめざす。
8	児童・生徒が主体となる「め・じ・と・ま・ふ」の授業展開の工夫 ～「学び方」を学び、学び続ける子どもの姿を目指して～	大橋　宏星	東近江市教育研究所 所長　　宮居　伝	指導主事　斎藤　陽	小中学校算数科・数学科において、子どもの「なぜだろう？」「わかった」「またやりたい」という思いを引き出し、自ら学びに向かう子どもの姿にスポットをあて、児童・生徒が主体となって授業をつくる段階（問題発見・解決の力を育てる授業）を目指し、東近江市の授業改善推進に資する研究とする。
9	児童・生徒が主体となる「め・じ・と・ま・ふ」の授業展開の工夫 ～「学び方」を学び、学び続ける子どもの姿を目指して～	北村　拓也	東近江市教育研究所 所長　　宮居　伝	指導主事　斎藤　陽	東近江市が研究を進めている「児童・生徒が主体となる『め・じ・と・ま・ふ』の授業展開の工夫」について、国語科の授業において、児童・生徒が「学び方」を身に付け、主体的に問題発見・問題解決に取り組む力を高めることを目指し、授業展開や掲示物、支援の工夫など、具体的な手立てを明らかにする。

No.	プロジェクト名	本学担当者	共同研究機関・担当者		研究内容（連携事業内容）
10	思いをもって聴き、自分の思いや考えを発信できる伴谷っこをめざして ～子どもが主体的に話したり、聞いたりできる授業づくり～	北村　拓也	甲賀市立伴谷小学校 校長　中嶋　政二	教諭（研究主任）　摺本　志保	話を主体的に聞くことができ、また、聞いた内容を生かして自分の思いを発信することができる子どもの姿を目指す。国語科の授業を窓口に、育成する資質・能力を明確にし、子どもたちの「聴きたい」「話したい」という思いを引き出し、子どもの実態に合った学習活動を意識した授業づくりに取り組む。
11	「読み解く力」の向上を目指して ～国語科における書く力を高める指導方法～	北村　拓也	守山市立物部小学校 校長　水野　恵	教頭　岡部　伊津子	自分の言葉で思いや考えを表現できる子どもの姿を目指し、自分の意見を明確にもつための書く場の設定、自分の考えを書くことができるための指導方法や手立てについて、国語科の授業を通して研究を進める。
12	幼稚園における事例検討を取り入れた発達障害児への指導力向上研修の実施	山川　直孝	守山市立物部幼稚園 園長　新庄真依子	園長　新庄真依子	発達障害のある幼児に対して、一人ひとりの教育的ニーズにあわせた支援の充実が課題となっている。そこで幼稚園教員を対象に、特別支援教育についての理解を深め、指導力の向上を目的とした研修会を実施する。研修の内容は、教員からの事前の聞き取りを参考に、幼稚園での困り感の強い事例をテーマに挙げ、心理検査結果の解釈や観察で明らかとなった行動の分析、集団の中での適切な支援方法等について、グループで検討する。実践的な研修となるように事例を取り上げたり、グループ協議を取り入れたりと工夫することで、教員同士の連携のもと、個に応じた支援が円滑かつ適切に、充実したものとなるように目指していく。
13	特別支援学級におけるポジティブ行動支援を活用した個別の指導計画作成研修の実施	山川　直孝	滋賀県内公立中学校	X教諭	特別支援学級の児童生徒の増加が課題となっており、特別支援学級担任には多様な教育的ニーズを必要とする児童生徒への支援の充実が求められている。生徒に効果的な支援を行うためには、個別の指導計画の妥当性等が影響すると考える。そこで、生徒への支援の充実を目的に、個々の障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服するための指導領域である自立活動の充実に着目し、自立活動に関する個別の指導計画の作成研修を行う。研修では、事例として示された情報（心理検査結果、行動観察等）を整理して実態把握を行い、グループで具体の目標設定や支援方法を検討し、個別の指導計画を作成する。生徒の困難なことのみを観点とするのではなく、長所や得意なことを作成の際には重視する。この考えはポジティブ行動支援となじみやすい。ポジティブ行動支援とは、当事者のポジティブな行動（本人のQOL向上や本人が価値のあると考える成果に直結する行動）をポジティブに（罰的ではない肯定的、教育的、予防的な方法で）支援するための枠組みのことで、先行研究では知的障害や発達障害児の有用性について報告されている。この研修では、ポジティブ行動支援の知見を活用していきたい。
14	アート思考や自己肯定感を高め、互いのよさや個性を認め尊重し合う子どもの育成 ～中規模校における対話型朝鑑賞（朝鑑賞）の活動を通して～	青木　善治	彦根市立平田小学校 校長　宮﨑　良雄	教頭　中尾　一美	朝学習時における朝鑑賞（対話型朝鑑賞）の2年目の効果を検証する。
15	アート思考や自己肯定感を高め、互いのよさや個性を認め尊重し合う子どもの育成 ～大規模校における対話型朝鑑賞（朝鑑賞）の活動を通して～	青木　善治	米原市立米原小学校 校長　有川　博延	校長　有川　博延	大規模校における朝鑑賞（対話型朝鑑賞）の効果を検証する。

No.	プロジェクト名	本学担当者	共同研究機関・担当者		研究内容（連携事業内容）
16	アート思考や自己肯定感を高め、互いのよさや個性を認め尊重し合う子どもの育成 ～小規模校における対話型朝鑑賞（朝鑑賞）の活動を通して～	青木　善治	彦根市立亀山小学校 校長　勝間　治	教頭　大塚康彦	小規模校における朝鑑賞（対話型朝鑑賞）の効果を検証する。
17	アート思考や自己肯定感を高め、互いのよさや個性を認め尊重し合う子どもの育成 ～大規模校における対話型朝鑑賞（朝鑑賞）の活動を通して～	青木　善治	彦根市立高宮小学校 校長　久保田　篤	教頭　北川尚樹	彦根市内の大規模校における朝鑑賞（対話型朝鑑賞）の効果を検証する。
18	児童生徒が学びを実感することができる授業づくり ～　「〇うんと考えひとり学び」と「〇かんがえの共有」の工夫　～	長岡　由記	甲賀市教育研究所 所長　福永　佐栄子	甲賀市研究所 研究員　山本　真由美	本研究では、付けたい力を明確化・焦点化・重点化し、「学びを実感する姿」を具現化した上で「〇うんと考えひとり学び」と「〇かんがえの共有」を学習過程に組み込んだ授業を実施し、その授業分析を通して、学びを深める授業展開にするための手立てと効果を明らかにすることを目的とする。
19	造形活動における「学びの場」と授業改善モデル	新関　伸也	滋賀県美術教育研究会 会長（豊郷町立豊日中学校校長） 大和　高成	高島市立安曇川中学校 教諭　堤　祥晃	令和6年度開催予定の全国造形教育研究大会（滋賀大会）に向けて、滋賀県美術教育研究会の研究テーマに沿った実践を行い、実践報告としてまとめる。
20	美術科における、題材のルールを生徒が自ら考える授業	新関　伸也	高島市立安曇川中学校 校長　川島　浩之	教諭　堤　祥晃	中学校美術科における題材において、「教師の助言のもとに生徒が学習の到達目標を設定することで、より主体的に活動に取り組めるのではないか」という仮説を実証する研究をおこなう。
21	地域連携型校内研究システム「つながる校内研究」の実証的研究 ～「Lesson Studyシート」の開発を通して～	渡邊　慶子	甲賀市教育研究所 所長　福永　佐栄子 甲賀市立水口小学校 校長　木村　健二 甲賀市立土山小学校 校長　佐々木　直子 甲賀市立雲井小学校 校長　中島　園子	甲賀市教育研究所 課長補佐　西村　栄樹	本事業の目的は，甲賀市内の複数校で連携して校内研究を実現するシステムを開発してそれを実証することである。この事業において，次の2点を研究課題とする。 ① 校内研究（特に授業研究-Lesson Study-）を先導して実施できる教員（いわゆる校内研究主任教諭）を育成すること。 ② 甲賀市の校内研究のプロセスや成果を共有するために校内研究（特にLesson Study）用ワークシート（以下，LSシート）を開発し，そのシートを実証しながらよりよいものにしていくこと。 本年度は，学校規模や地域性等の異なる3校の校内研究主任が各校内研究の計画・実行・振り返りを共有し，各自校の校内研究に新たな工夫やアイデアが生み出されることを目指す。
22	主体的に遊ぶ子どもの育ちを支えるための環境づくり（4歳児）	塩見　弘子	草津市立老上こども園 園長　中島　昭子	副園長　杢田　昌恵 研究主任　力石　さやか	草津市立老上こども園において、昨年度「3歳児の遊びを豊かにし、育ちを支える環境づくり」として3歳児の発達特性を考え、「モノ（素材、材料等）との出合い」に視点を持ち、遊びが生まれるふさわしい環境を省察し、指導計画の見直しに活かしていった。今年度は、昨年度の成果を踏まえて「モノと向き合う」4歳児の保育の中での環境づくりを進めていきたい。
23	「確かな学力」の向上を目指す、児童が見通しをもつことに重点を置いた指導と評価の一体化 －児童の学習把握に1人1台端末を活用した小学校理科の指導改善－	加納　圭	滋賀県総合教育センター 所長　近藤　敏夫	研修指導主事　多田　尚平	観察、実験を行うにあたって、児童が見通しをもつことに重点を置いた指導をするとともに、指導者が1人1台端末を活用して学習状況を把握し、指導と評価の一体化を図ることにより、自然の事物・現象についての問題を科学的に解決するために必要な資質・能力を育成し、「確かな学力」の向上を目指す。

No.	プロジェクト名	本学担当者	共同研究機関・担当者		研究内容（連携事業内容）
24	義務教育現場を対象とした【声を鍛えるルーティントレーニング】の作成・実施 「反復トレーニング」編	渡邊　史	滋賀大学教育学部 附属小学校 校長　田中 宏子	教諭　矢吹 雄介 先生 （4年生担任・合唱部指導者）	● 発達期にある児童生徒を対象として「表現ツール」としての「声」の構築、汎用の動機づけを行う。 ● 児童生徒が「自身の声」と向き合うことで「自分自身」と客観的に対峙、すなわち「客観的視点」を獲得して いくためのきっかけとなることを期待し、トレーニングを実施する。 ●「声表現」の具体的スキル構築に取り組むことで、「声」を構築するために必要な身体各部の働きを意識 させることで心身の健やかさを保つための様々な「気づき」「自己確認」のきっかけを提供する。
25	附属特別支援学校高等部との協働による音楽の授業開発プロジェクト	○林　睦 山本　知香	滋賀大学教育学部 附属特別支援学校 校長　辻　延浩	高等部主事　成田　豊 高等部教諭　巻幡知栄	附属特別支援学校高等部と音楽の授業開発プロジェクトを実施し、その成果を今後の特別支援学校の音楽の授業支援に活かす。
26	地域とともにある教育活動の教育実践	今井　弘樹	大津市立田上中学校 校長　石田　博士	教頭　荒川　拓也 教諭　手島　剛也	本校の生徒は、自ら何かを成し遂げるという経験や成功の体験などが乏しいため、自信が持てず、挑戦する気持ちや意欲が持続できないなどの課題がある。 そこで、「たしかな自尊感情（自尊心）の育成」を今年度の校内の研究テーマとし、自尊感情の育成のために、地域での貢献活動、基礎学力の定着、居場所づくりを研究の中心として活動を進める。
27	教師力向上を目指したOJT研修 －職場の同僚性を高め、授業改善を図るために－	今井　弘樹	大津市立瀬田中学校 校長　人見　和宏	教頭　福田　寛 教諭　渡邊　博三	本校では20～30代の教員が半数以上を占めるようになり、教師力の向上が喫緊の課題となっている。昨年度に引き続き、特に若手教員が互いの課題や悩みを気軽に相談できる関係性を構築することをさらに進め、学校全体の教師力の向上を図る。
28	石山っ子わくわく親子で畑体験隊	○森　太郎 與倉　弘子 久保　加織 石川　俊之	大津市石山公民館 館長　深尾　和之	石山公民館 生涯学習専門員　清水 琴野	農作物の栽培や観察など実体験を重視して農と食の大切さを理解し、食の安全・安心について考えるような「食農教育」が求められている。しかし、学校現場において、そのニーズに対応できるプログラムの確立、対応できる教員の確保は不十分である。そこで、地域の住民と連携（公民館、ボランティアスタッフ）して、小学生の親子を対象に畑体験活動を実施し、「食農教育」の地域連携プログラムを開発する。さらに、教育学部の学生が主体的にプログラムを計画・実施する場面を設け、教育現場において「食農教育」に対応できる人材を育成する。
29	地域の在来野菜の栽培を通した総合的な学習の時間のプログラム開発	森 太郎	甲賀市立甲南第二小学校 校長　池田 修一	教諭　深田航希 （第三学年担任） 教務主任　菰田智恵	子供の「生きる力」の育成のための体験活動の充実、伝統と文化の尊重の観点から、在来野菜を教材とした栽培学習の充実が求められている。このような学習は、小学校の総合的な学習の時間で行われることが多い。しかし、子供たちが在来野菜を栽培するという活動だけに終わっていることが多く、体験活動を様々な学びに繋げる授業づくりが必要だと考える。本研究では、在来野菜の栽培を通した総合的な学習の時間のプログラムを開発する。本年度は、①リフレクションによる学びの充実、②ICTを活用した他校（伊吹小学校）との在来作物の栽培学習の交流による学びの広がりを中心に実施する。

No.	プロジェクト名	本学担当者	共同研究機関・担当者		研究内容（連携事業内容）
30	情報活用の実践力を基盤とした中学校社会科の思考・判断・表現力の育成	岸本　実	守山市教育研究所 所長　脇坂　久徳	研究員　折木　公美	平成29年告示の学習指導要領では、すべての教科の基盤としての情報活用能力と社会科で育成すべき「公民としての資質・能力」が整理された。本研究では、特に情報活用能力の中の情報活用の実践力を基盤として、社会科の思考・判断・表現の目標である社会について「考察・構想する力」「考察・構想したことを説明・議論する力」を、どのような単元・授業で育成することができるかを明らかにする。
31	地域にねざした学校カリキュラムの開発	岸本　実	甲賀市立伴谷小学校 校長　中嶋　政二	教諭　藤井　沙季	本研究の目的は、甲賀市立伴谷小学校にける地域にねざした学校カリキュラムの開発およびそのための基礎研究を行うことを目的としている。伴谷小学校の学区には、取組内容に示した遺跡や古文書がある。これらの調査を追跡するとともに、現地のフィールドワークを行い、どのように学校カリキュラムに活用できるかを考察する。
32	小学校教員の指導力向上を図る校内研究・校内研修	岸本　実	栗東市立葉山小学校 校長　池田　隆	教諭　柴原　茜	教育課題が複雑化した今日、教員は、学校の同僚とつながり、協働して授業実践を作り出しながら、それを共に省察していくことを通して、自らの専門性を高めていくことが求められている。本研究では、小学校においてそうした協働の取組と省察を通して、教員としての指導力を向上させることができるような校内研究・校内研修の在り方を明らかにすることを目的としている。
33	児童が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整する小学校外国語科における言語活動の充実	大嶋　秀樹	滋賀県総合教育センター 所長　近藤　敏夫	研究員　中川絵美 研修指導主事　中井やよい 主幹　加藤由紀	小学校外国語科における実践研究を通じて、指導者が一人ひとりの児童の学習状況を適切に把握し、授業改善につなげ、児童が自らの学習状況を把握し、主体的に学習を調整し、「個別最適な学び」、「協働的な学び」の充実をはかることを目的とする。